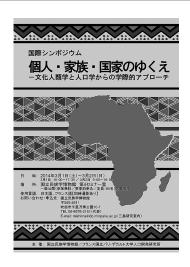
## 研究成果の公開――最近開催されたシンポジウムから



国際シンポジウム

「個人・家族・国家のゆくえ― 文化人類学と人口学からの学際 的アプローチ」

日時:2014年3月1日(土)~2日(日) 場所:国立民族学博物館 第4セミナー室 主催:国立民族学博物館、フランス国立パ

リ·デカルト大学人口開発研究所 企画:三島禎子(国立民族学博物館)

このシンポジウムは、民博とフランス 国立パリ・デカルト大学人口開発研究所と の学術提携にもとづき、学際的な国際共同 研究の一環として行われた。

今日の複雑な社会における個人と家族、 国家が直面する課題を、サブサハラ・アフ リカ地域の人口問題に絞り、国際人口移動 や保健医療、ジェンダー、家族などのテー マから検討した。それぞれの発表では、意 思決定の主体とみなされる個人と家族、国 家を分析対象とし、文化人類学と人口学双 方による考察をめざした。人口学は国家政 策と深く結びついているゆえに、個人や家 族の意思決定の多様化に対応することが将 来的課題である。一方、文化人類学は現代 社会の新しい枠組みに即した研究をするこ とが求められている。本シンポジウム

では、このような各学問領域の葛藤と 模索を踏まえ、現代アフリカ社会の具 体的事例を取りあげながら人口学と文 化人類学の理論的考察を行い、同時に これらの成果を日仏および国際的な援 助機関などと共有することによって、 人文・社会科学研究の社会的還元につ いて意見を交換することができた。 機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」

国際ワークショップ

コンピュータとドキュメンテーション──民族学資料のデジタル化とその利用

日時:2014年3月3日(月)~7日(金) 場所:国立民族学博物館 第4セミナー室、 天理大学天理参考館、奈良国立博物

館、元興寺文化財研究所 企画:佐々木史郎(国立民族学博物館)

本プロジェクトは大きな課題として、1. 民族学資料(標本資料と映像音響資料)の 収集、2. その保存と修復、3. その情報 化と管理、4. その学術的ならびに社会的 利用という4つの問題を設定している。 それらのなかでも、日本の博物館が最も 苦手とする資料のドキュメンテーション (documentation)を中心に検討することを、 本ワークショップでは目的とした。民族学 資料の文書化とデジタル化に関して、技術 進歩にいかに対処するか、そのような技術 が博物館には必要かといった共有する諸問 題を、ロシア民族学博物館(REM)から4 名の研究者を招聘し、議論を交わした。そ のなかで、ロシアには台帳に残された大量 の資料情報を活用できる反面、国が共通 フォーマットによる情報共有を目指してお り、それへの対応に追われていること、日 本では早くから情報のデジタル化を進め、 クラウド型の情報集積と共有を目指す一方 で、肝心の資料情報そのものが不足してい ることなど、対照的な姿が浮き彫りにされ た。民博でワークショップを行った後、奈 良国立博物館、天理参考館、京都大学総合 博物館などで視察と意見交換を行い、より 考察を深めた。



みんぱく公開講演会 「働き者と、ナマケモノ ──『はたらきかた』文化論」

日時:2014年3月20日(木) 場所:オーバルホール

主催:国立民族学博物館·毎日新聞社



日本人にとって、勤勉さはとりわけ重要な自己意識である。戦後の急速な経済発展を勤勉な国民性ゆえと考える向きも強い。しかし昨今、景気低迷とともに雇用問題がたびたび話題になるに及び、日本人のはたらきかたにも見直しが迫られている。そもそも世界には、さまざまなはたらきかたがあり、さまざまな勤勉観があるのではないだろうか。また、勤勉であるは、普遍的に善なのだろうか。

本講演会では、さまざまな生活環境におけるはたらきかたをとりあげ、一般的な現代日本人の労働観、勤勉観の相対化を試みた。まず社会福祉制度が先進的に発達しているフィンランドにおける人々の労働観、勤勉観を庄司博史(国立民族学博物館)が紹介した。次に、成果の不確実性が常に大きく、危険とも隣り合わせの労働環境にいる日本のカツオ漁業者の事例を、若林良和(愛媛大学)が紹介した。そのうえで、北タイの農村と日系工場における女性たちのはたらきかたと行動への注目から、平井京之介(国立民族学博物館)がコメントした。

この講演会を通じて、さまざまな社会や 集団ごとの「はたらきかた」にこめられた、 人々が健康で幸せに生きるための知につい て考える機会が提供できた。